



第41回 日産 童話と絵本のグランプリ

な か な お
仲直し
マサキナオミ

『…それと、きょうは雪がふりましたね。私、すごいこと発見したよ。けどそれはこんど雪がふった日に教えます。本当にすごいから、楽しみにしてね。 サヤ』

学校の帰り道、ミオはうつむきながら歩いていた。てぶくろを忘れて、かさを待つ手がかじかんでいる。

「お、ミオどうした。今日も一人じゃん。サヤ、用務員のおっさんとしやべってたぜ」うしろからリヨウタの声がした。ミオのかさとリヨウタのかさがぶつかって、雨のしずくがツトと落ちる。ミオがだまつていると、

「なに、やつぱりサヤとけんかした？」リヨウタがするどい質問を投げってきた。まったく、ふだんは人の気持ちなんかおかまいなしのくせに、時々やけにするどい。

「ほつといてよ。リヨウタに関係ない」うつむいたまま、ミオは足を速めた。

「そうか。それでお前、今日のデザートジャンケン参加しなかったんだな。そりやあかなり落ちこんでるな」

よけいなお世話だ。確かに、あまつた

デザートをかけたジャンケン大会に、いつもならミオも必ず参加していた。「うるさいな。昨日でつかい口内炎ができちゃって、食べる気にならなかったの」ミオがますます足を速めたのに、リヨウタはぼつちり追いついてくる。

「かわいそお。親友とけんかしちゃ、口内炎もできるわな」

「もううるさい！」

ミオはかけ出した。

「気にすんなよ、けんかくらい。おれなんかしょっちゅうなんだから」ランドセルにリヨウタの声がぶつかる。はげましてくれているのかもしれないけど、今のミオには傷口に塩をぬるみたいでヒリヒリ痛い。もとはと言えばリヨウタのせいでもあるんだから。頭がカーツと熱くなる。

三日前の帰りの会のことだ。三学期になつてから落とし物が増え、持ち物には必ず名前を書こう、とクラスで話し合った。それなのに、その日も消しゴム二つに絵の具チューブが一つ、落とし物はこに入れられていた。どれも名前なし。帰りの会で持ち主をさがす

のは、落し物係りのサヤの仕事だった。「これだれのですか。持ち主は手を挙げてください」

落ち着いたサヤの声が教室にひびいた。「急げよお。六年にボール取られるだろ。はやく、はやく」

一刻も早く外で遊びたいリヨウタがせかした。最近よく帰りの会が長引くのでイライラしているのだ。リヨウタにつられて何人かの男子もサヤにむかって、はやく、はやくと合唱し始めた。

「静かにしてください。これ、三つとも名前書いてません。もう、もらっちゃいますよ」

教室がさわがしくなつて、サヤは必死の表情で声をはり上げた。すると、

「名前書いてません。もらっちゃいますよ」リヨウタが思い切り変な顔をして、くねくねと体をくねらせながらサヤの口まねをした。教室中がどつと笑う。ミオもリヨウタの動きがおかしくて、つい吹き出した。ミオがはつとしてサヤを見たとき、サヤは顔を真っ赤にしてうつむいていた。よく見るとぼたりぼたりと涙が机に落ちていた。ああ、サ

ヤちゃんに悪いことしちゃった。ミオは胸がザワザワした。そして嵐のような帰りの会のあと、

「サヤちゃん」

いつしよに帰ろうとミオがサヤの席に近づくと、サヤはさつと目をそらし、ランドセルを背負うと教室を出て行ってしまった。それからミオはサヤに一度も声をかけることができていない。

ミオは帰り道をとぼとぼと歩いた。学校から出てきた子ども達で通学路はぎやかだ。それなのに、ミオだけが別の場所から画面に映る景色をながめているみたいで、なんだか世界から取り残された気分だった。

「はあ、なんでこうなるの」

声を出さないと消えてしまいうので、ミオが一人つぶやくと、口内炎がズキリと痛んだ。

気づくと橋の上にさしかかっていた。今はほとんど水の無い川の小さな橋だ。空色のらんかんはところどころペンキがはげて、近づくと鉄のおいがする。ミオはらんかんにもたれて景色をながめた。いつの間にか雨があがっている。

一月の空気が冷たくて、吸い込むと鼻の奥が痛くなる。橋の上だからなのかさつきよりいっそう寒くなった気がしてミオは身ぶるいしながらかさを閉じた。

一月と言えば、ミオとサヤが交換日記を始めてちょうど一年がたつ。あの時はまだ三年生。四年生になつてもしクラスがはなれても、おたがいのことがわかるようにと、サヤの提案で始めた日記だ。交換日記はこの三日間ミオのランドセルでねむっている。

「交換日記おわつちやうのかな。仲直り、したいなあ」

「仲直り」って、考えてみたらまるで自然に仲が直るみたいなひびきだ。なんかちよつと無責任。がんばって仲直りするのには、「仲直り」かな。だったら私は仲直しがしたい。どうやったら仲直しできるんだろう。

けんかする前のサヤの笑顔が目にかぶ。いつもはとも明るくて、やさしくて、元気な子だ。男子とけんかになつたつて、ちよつとやそつとじや負けない。あの日はクラス中に笑われて、よほど傷付いたんだと思う。友達のピ

ンチを笑う私はサイテーだ。
「もおー、サイテーだあー」
橋の向こうに向かってお腹の底からさ
けんだ。すると、後ろを通り過ぎるお
ばあさんがおどろいた顔で立ち止まり、
また歩いて行つた。

はずかしくなつて、ミオはかたをす
くめた。両手がしびれるように冷たい。
はあつ、と息をふきかけて空を見上げ
たときだ。ふわふわとまいおりてくる
白いものに気が付いた。

「あ、あれ、雪だ」
一度雨がやんで、今度は雪が降り出し
たのだ。雪はあとからあとからまいお
りてくる。ミオは思わず両手で雪を受
け止めた。

『：それと、きょうは雪がふりました
ね。私、すごいこと発見したよ。けど
それはこんど雪がふつた日に教えます。
本当にすごいから、楽しみにしててね。

ふいにミオは思い出した。去年交換日
記を始めた日にサヤが書いていたこと。
サヤのすごい発見って何だろう。サヤ
は私に何を教えたかつたんだろう。知

ミオは少し間を置いて、空を見つめた
まま言った。
「ううん。ミオが私を笑つたわけじゃな
いのはわかつてたんだ。だけどくやし
くなつちやつて。私も、ごめんね」
二人は空から目をもどすと、おたが
いの顔を見て、それからまたへツと
笑つた。

「おーい、その二人。仲直りしたのか
よ。何やつてんのー」
こちらに大きく手を振っているのはリョ
ウタだ。一度帰つて、また遊びに来た
みたいだ。

「えー、教えなーい」
ミオとサヤ、二人の声がそろつて、思
わず大笑いした。
仲直しも大成功。でも、私だけじゃ
なく、サヤちゃんもがんばってくれた
わけで、二人のがんばりで仲が直つた
んだから、やつぱり「仲直り」なのかな。

いつも通りのサヤの笑顔を見ながらミ
オは少しの間考えていた。
雪はますます降ってくる。リョウタ
に雪エレベーターの説明を始めたサヤ
とならんで、ミオはまた空を見上げる

りたい。ぜつたいサヤに聞かなきゃ。も
しかしたら、これをきつかけに「仲直し」
できるかもしれない。ミオはもと来た
道を学校に向かって走り出した。

道にはうつすら雪が積もりはじめて
いる。走りながら息をすると、鼻も胸
もジンと痛い。走るのは得意じゃない。
でも走らなきゃ。学校から帰る小学生
のふしぎそうな視線を浴びながら、ミ
オはけんめいに走つた。ちようど学校
が見えてきたとき、こちらに向かつて
すごい勢いで走ってくる人影があつた。

「あ、サヤ」
思わずすれちがいそうになつて、ミオ
もサヤも両足に急ブレーキをかける。
「ミオ、よかった。いっしょに行こう。
今ならできるんだ。去年私が日記に書
いたの、覚えてる？ぜつたいミオに教え
たくて」

「私もね、ぜつたいサヤちゃんにそれを
聞こうと思つて、走つてきた」
サヤがミオの手を取つて、二人は学校
に向かつて走り出した。サヤの手は温
かくて、心臓まで一気に温まる気がした。
グラウンドに着くと、二人とも息を

と、一月の冷たい空気を思い切り吸い
込んだ。

整えながら少しの間おたがいの顔を見
た。どちらからともなくへツと笑う。
「ミオ、じゃあいくよ。空から雪が降つ
てくるでしょ。私たちはね、空の一つ
の場所をじーつと見るの。同じ場所を
ずつと見てるんだよ。まばたきもなる
べくしないで」

「うん。わかつた」
二人はならんで空を見上げた。さつき
までのんびり降つていた雪は勢いを増
し、次から次へ、空からわき出すよう
に降ってくる。時々目に雪が入るのを
こらえながら、じつと空の一点を見つ
める。するとしばらくして体がふわり
と浮いた気がした。まるで見つめてい
る空のその場所に向かつて吸い込まれ
ていくみたいだ。雪が降ってくるんじや
なくて、自分がのぼつて行くような、
それはふしぎな感覚だつた。

「サヤちゃんすごい！私空にのぼつてるよ」
「やつた。雪エレベーター大成功！ずつ
とミオと一緒にやりたかつたんだ」
サヤの声がはずんでいる。
「サヤちゃん、ごめんね。あの時すごく、
いやだつたよね」

マサキナオミ

主婦 滋賀県

受賞のことば

私の創作活動は、一人勝手に迷い道を
ウロウロすることばかり。恩師からの「と
にかく続けてね」の言葉を励みに書き続
けて、ようやく自分なりの「続ける意味」
がぼんやり見えてきたところでした。こ
の賞をいただき、「それでいいよ」と頷
いてもらったような気持ちです。今後も
子ども達にとってのロイター板みたいな
お話を創り続けていきたいです。

【受賞歴】 第35回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作
第36回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

審査員コメント

日常生活の中での小さないさかいを
通して、再び友情を深めていく子ども
の心情と姿が、細やかに描かれてい
ます。意識的な行動を伴う「仲直し」
の題名が成功しているし、「雪エレベ
ーター」という命名やリョウタのキャラク
ターも面白い。

吉橋 通夫

